

45 錦帯橋歌

錦帯橋の歌

防州錦橋天下無

ぼうしゅう きんきょうてんか
防州の錦橋天下に無し

山秀水清似畫圖

ひい きよ かと
山秀でて水清く畫圖に似たる

山花如錦今已絶

さんか にしき すて た
山花 錦の如く今 已に絶つ

錦水依舊以錦呼

きんすい きゅう いしき
錦水 舊に依て以て錦と呼ぶ

錦橋不改當年色

きんきょう とうねん
錦橋 改らず當年の色

蜿々五龍相追趨

えんえん ごりゅう あり おもむ
蜿々として五龍 相い追つて趨く

記嘗誤落風塵裡

かつ あやまり ふうじん うち
記するは嘗て 誤て風塵の裡に落ち

凌晨度雪入城郭

あした しの わた じょうかく
晨に凌ぎ雪を度り城郭に入る

橋上雪深足屢躓

きょうじょう せき かし しばしば つまず
橋上 雪 深く足 屢 躓く

且苦寒威凜裂膚

かんい りん さ
且つ寒威に苦しみ凜として膚を裂く

又記斜風細雨夕

また記す しゃふう さいう ゆうへ
又た記す斜風 細雨の夕

天風捲傘衣裳濡

てんふう かせ ま いしやう ぬ
天風 傘を捲き衣裳 濡れる

風景雖好不消受

風景 好しと雖も受るを消す

二十餘年負名區

二十餘年の名區に負つ

今日微官一從擲

今日 微官 一たび從つて擲つ

山光水色頓覺殊

山光 水色 頓に殊なるを覺ゆ

昨日度雪顛躑處

昨日 雪を度りて顛躑せし處

今日驢背撚吟鬚

今日 驢の背に吟鬚を撚る

昔日風雨濡衣處

昔日 風雨に衣を濡らせし處

今日風雨被夫須

今日 風雨に夫れを須いられる

風雪今日却為趣

風雪 今日 却て趣を為す

不教人苦教人娛

人の苦を教えず人 娛を教え

况復清明好風景

況んや復た清明 好風景

柳罩水樓煙模糊

柳は水樓に罩め煙りて模糊たり

又是涼秋好時節

又た是れ 涼秋を好き時節なり

一道金波月跳珠

一道の金波 月 珠に跳ねる

此時朗吟橋上過

恍訝乘龍遊太虛

始覺仙凡不迴隔

悟則天道迷三途

陶潛歸去悔不早

何須題柱學相如

錦橋即是昇仙路

為走名利為凡夫

寄語橋上奔走客

蓋讀錦帶橋歌乎

為歌々之豈無意

吾元錦水一釣徒

此時 朗吟して 橋上を過る

恍として訝かる龍に乗じて太虚に遊ぶと

始めて覺ゆ仙は凡て迴を隔だてず

則ち天道を悟り三途に迷う

陶潛 歸去 早からざりきを悔い

何んぞ須らく柱に題して相學び如く

錦橋 即ち是れ昇仙の路

名利に走るを為して凡夫の為すとす

橋上に語を寄す奔走の客

蓋讀して錦帶橋 歌 乎な

歌を為す之の歌 豈 意 無からんや

吾れ元 錦水の 一釣の徒

語釈

錦帶橋 山口県岩国市錦川に懸かる橋

防州 周防の國 山口県岩国市。錦橋 錦帶橋。天下 天の下、國全体、世界。書圖 絵に描

いたように。山花^{さんか}＝山の草木。繡^{しゅう}＝錦、五色の糸で美しく模様を織りだした絹織物、錦のように美しい物のたとえ、褒め言葉。錦水^{きんすい}＝錦川。舊^{きゅう}＝旧古く、昔。依^い＝依て、やすんじる、たとえる、たとえ、したがう、したがって。蜿々^{えんえん}＝なうねと。五龍^{ごりゅう}＝五匹の龍。相追^{あひおひ}す趨^{すう}＝五匹の龍が相追い小走りに行く。趨^{すう}＝足早に行く、小走りに行く、早い、速やか。風塵^{ふうじん}＝世上の煩わしい物事。裡^り裡^{うち}、なか、うら、内側、心の中、こころ。晨^{しん}＝晨、夜明け、早朝。凌^{りゅう}＝凌ぐ、凌駕^{りゅうが}、越える、侵す。度^ど度^{たび}も、何度も、渡る。城郭^{じやうかく}＝城郭、郭、城の外囲い。躡^{しゆ}＝躡く、足をとられる。寒威^{かんい}＝寒さの威力、寒さの敵しいこと。凜^{りん}＝寒威凜々として、寒さの敵しいさま、敵しい、寒い。裂膚^{れつぷ}＝寒さの敵しく膚も裂ける。斜風^{しゃふう}＝斜めに吹く。「細雨^{さいう}＝細かい雨、小糠雨^{けん}。捲^{けん}く、風で衣の裾が捲き上がる。衣裳^{いしやう}＝着物、衣の裳裾。雖^{いへん}＝けれども、たち、これ、もし、としてももの助字。名區^{ないく}＝名勝、名のある区域。微官^{ゑいかん}＝微官ともいう、官吏が自分を謙遜して言う言葉。一擲^{いちてき}＝投げ打って。山光^{さんかう}＝山の光、山の色、ようすが。頓殊^{とんとしゆ}＝頓に、殊に。顛躓^{てんとし}＝躓き転倒した。驢背^{ろはい}＝驢馬の背。鬚髯^{しゆねん}＝驢馬の鬚、頸鬚、背鬚を撚る。夫れ^そ＝かれ、かの、その、あの。須^す＝もとめる、用いる、待つ、すべからく、しばし。被^ひる、被る。却^{かえり}＝却て、かえり、退ける、拒む、受け付けない返す、抑える。趣^{しゆ}＝趣、様子、さま、風情。娛^こ＝楽しみ。況んや^{いは}＝まして。復^{ふく}＝回復、顧みる、また。清明^{せいめい}＝清い、明るい。水樓^{すいろう}＝水辺の高殿、水閣、二階家、船宿か。罩^と＝籠、魚を取る竹籠、かぶせる、つつむ。模糊^{もこ}＝ぼんやりとはっきりしないさま。涼秋^{りやうしゅう}＝涼しい秋。金波^{きんぱ}の月^{げつ}＝月が波の上を照らし金色に輝くさま。朗吟^{らういん}＝朗々と吟じる。恍訝^{わうげん}＝かすかに訝り怪しむ、うっとり、仄が訝る、怪しむ、疑い。大虚^{たいきょ}＝大空、宇宙。仙^{せん}＝仙人。迴隔^{けいかく}＝遥かに隔たる、遠く隔たる、光に輝く。凡^{ぼん}＝凡て、併せて皆、凡そ。天道^{てんどう}＝天道、自然の原理。三途^{さんず}＝地獄道、畜生道、餓鬼道、の三悪道。陶潜^{たうけん}＝東晋の自然詩人。昇仙^{しやうせん}＝仙人となり天に昇る。名利^{めいり}＝名譽と利益。凡夫^{ぼんぷ}＝凡人、並の人、普通の人。奔走^{ほんそう}＝急いで走り赴く、忙しく走り回って相手の世話をする友。蓋^{けだ}＝思うに、これ、むしろ、なんぞ。豈^{あに}＝ねがう、ほつとする、どうして、なんと、ほとんど。一釣^{いちてう}の徒^と＝一人の釣り徒。徒^と、僕^{しもべ}、ともがら、なかま、生徒、弟子、無駄に、徒に、人夫。

通釈

周防岩国の錦帯橋は天下に二つとない、山は秀で水清く画く絵のよつである、山の草木は錦のように映えるが既に終わり、錦川 昔から以て錦と呼ぶ、うねうねと五頭の龍が互いを追いつ抜かれつ行く、記す以前に誤つ

て世俗の煩わしさのなかに落ちる、早朝雪を凌ぎ渡って城郭に入る、橋の上の雪は深く屢々躓く、且つ寒さ厳しく苦しむ凜然として皮膚を裂く、また記す風が斜めに吹き細雨の降る夕べ、空からの風に笠を捲きあげられ衣装も濡れる、風景が佳いというけれども受けるを消さず、二十余年の名の有る場所とは思えなかった、今日こんにち微かな官職を自ら辞して見れば、橋畔の山の様子や川の風景がことに美しさを覚える、昨日雪の中を渡り躓き転んだ処も、今日驢馬の背でたてがみ鬣を撚りながら吟じる、昔日風や雨に衣を濡らした処も、今日風雨やそれを用以羸れる、その風雪も今日却つて風情がある、人の苦しみを教えず却つて人のたのしみ娯楽を教える、ましてまた清く明るい佳い景色を、柳が水辺の楼閣を覆いぼんやりとして煙り、またこれ涼しい秋の好季節となれば、一筋の月が波の上を照らし金色の珠となり跳ねる、この時朗々と吟じて橋の上を過ぎれば、仄かに訝る龍に乗り大空に遊ぶとは、始めて覚える仙か風は全てを遙かに隔てないと、即ち自然の原理を悟れば地獄道 畜生道 餓鬼道の三悪道に迷うを感じている、東晋の自然詩人の陶潜たうせんの如く早く官を辞すの遅かったことが悔やまれる、どうして柱題して相如を学ばなかったのかと、錦帯橋即ちこれ仙人となり天に昇る路、名誉と利益に走ることは凡夫のすることである、橋の上で言葉を寄せ忙しく走り廻る客がある、どうして錦帯橋の歌を読まなかったのか、歌を詠むと云って別に意味がある訳ではない、私は元々錦川の一人の釣魚つりうしりの仲間ではない。

46 中秋懷馨堂

「馨堂在東三載、還

始逢中秋、余欲同賞

月、即馨堂臥病矣、

而此夜雨無月、因賦

此寄示、

ちゅうしゅう けいどう
中秋に馨堂を懷う

けいどうひがし さんさい
馨堂東の三載に在り還を、

ちゅうしゅう ちゅうしゅう
始て中秋に逢い、余同に月を賞さんと欲す、

けいどう やまい が かな
即ち馨堂 病に臥す矣、

しかし
而て此の夜雨にして月無く、因つて此に賦して

寄せて示す、

醴醑滿樽誰共頡

衡門只有草蟲聲

人逢良夜蕭々臥

雲向中秋故々生

東武月花三載夢

西周風雨一霄情

れいそく ねんご
醴醑 樽に満ちて誰と頡 を共にせん

こうもん たた そうちゅう こうえ
衡門 只 草蟲の聲有り

あ しちつじやう が
人は良夜に逢い 蕭々と臥す

ちゅうしゅう ちゅうしゅう
雲は 中秋に向い故に故より生じ

とうぶ げっか さんさい
東武の月花 三載の夢

せいしゅう ふうう ひとしやうじやう
西周の風雨 一霄の情

世間快意難多得

世間の快意 多く得難し

早晚重尋詩酒盟

早晚重て尋ねる詩酒の盟

語釈

馨堂けいどう＝大草馨堂おほくさけいどう、藩校の養老館で南部五竹の学友。東に在り＝江戸に居る。三載さんざい＝三歳、三年。還かへ＝かえる、もどる、めぐる、また、ふた

たび。中秋しゅうしゅう＝中秋の明月、満月、陰曆八月十五日。臥が＝病で伏せる、ねる、病臥。醒せい＝こしざけ、濾した良い酒。滿樽まんぞん＝樽に満ちる、樽に満杯。

願ねが＝いたって、いたる、ねんごろ、丈が高い、長い。衡門けいもん＝冠木門粗末な家、隱者の家。草蟲そうちゅう＝草の中の虫。蕭々しょうしょう＝ひっそりとして寂しいさま。故々ここ

＝ゆえに、それだから。東武とうぶ＝江戸、東武州。月花三載げつげさんざい＝月や花を愛で三歳、三年、早三年。風雨ふうう＝風や雨、嵐。一霄いつせう＝一夜、宵。西周しせい＝西はあま

なく、広く。世間せけん＝世の中、一般に。快意かいい＝快意、快く思う。得難えがた＝得ることが難しい。早晚そうばん＝早い裡に、早い晩に。詩酒ししゆ＝詩や酒、酒を酌みな

がら詩賦詠う。盟めいす＝ちかう、約束。

通釈

馨堂江戸に三年居て帰る、私は始めて「仲秋の名月を彼と共に愛でようと思ひ逢う、即ち馨堂病床に横臥

していた、そして此の夜は曇りで月は無く因って此の詩を賦して寄せて示す。濾した良い酒を樽に満たして誰と親

しく共にしようか、粗末な家にただ草の虫が鳴いている、人は良く夜に逢いひっそりと寂しく横臥する、雲は仲秋

に向かい故にもとより生じる、江戸の月や花を愛で三年の夢、西は遍く廣く雨や風も一夜の情、世の中一般に快く

多くを得ることは難しい、早い裡にまた尋ねて酒を酌みながら詩賦を詠む約束をした。

47 盤山行

盤山行

巖國之山何其童

巖國の山 何んぞ其の童

濯々有似牛山容

濯々と牛山の容に似たり有り

語我隣家一老翁

我に語る隣家の一老翁

往日豈與今日同

往日 豈 今日と同うす

山無他樹皆金松

山に他樹 無く皆 金松

々々連天緑鬱葱

金松 天に連りて緑 鬱葱たり

白日瞑々路不通

白日 瞑々にして路 通ぜず

宅蜈蚣兮棲蛇龍

蜈蚣を宅して蛇龍を棲む

當時君子明而聡

當時の君子 明にして聡

深慮草賊遁此中

深慮なる草賊 此の中に遁す

抛為巢窟逞姦凶

抛て巢窟と為し姦凶に逞しくす

公宮一瞰可俯攻

公宮 一瞰 攻を俯す可し

盡伐金松付匠工
命為政府速終功
爾後政和民時雍
五日一雨十日風
存亡循環元無窮
政府一朝遭祝融
松材化煙飛昇空
散繞盤山峯又峯
往事茫茫如飛鴻
盤山不動高且重
熟視形勢凝雙瞳
宜築城郭以禦戎
韶年昇平廢刀弓
如此形勢付蓬茸

盡く金松を伐して匠工に付す
命は政府の為に速やかに功を終えん
爾後お政和し民時に雍ぎ
五日一雨十日の風
存亡循環元窮り無し
政府一朝にして祝融に遭い
松材煙に化して飛んで空に昇る
盤山の峯又た峯を繞りて散じ
往事茫茫飛鴻の如し
盤山動かず高く且つ重し
形勢を熟視し雙瞳を凝しせば
城郭を築くに宜く以て戎を禦す
韶年の昇平刀弓を廢す
此の如き形勢蓬茸に付す

君不見城山之城

君 見ずや城 山の城を

亦復干隍空余舊蹤

亦た復た干隍 空しく舊蹤を余す

只見青松鬱々映碧穹

只だ見る青松 鬱々と碧穹に映ず

或童或不好任從

或は童は或は好んで任に從わず

懷古思今感曷終

懷古して今に思えば感 曷ぞ終りむ

城山蒼々盤山紅

城山 蒼々として盤山 紅なり

日落實相院裡鐘

日が落ちる實相院 裡の鐘

語釈 盤山＝岩国山、二七七、八米。巖國＝岩国。濯々＝楽しみ遊ぶさま、たくたくと牛が歩くさま。山容＝山の形。姿。往日＝過ぎし日、以前。

青、金松＝赤松、金になる松。天線緑が天高く。鬱葱＝青々と茂るさま、こんもりと。白日＝昼間。日中。瞑々＝眠る、眼が眩む。蜈蚣＝ムカデ。蛇龍

＝蛇と龍。君子＝才徳の有る人。金松＝金に成る松の木。明＝明るい、明らか、賢い、明君。聡い＝賢い、聡明。深慮＝深く思つ、用心深い、熟慮

草賊＝こそ泥、追い剥ぎ、乱民。遁＝逃げる、逃れる、移る、避ける、去る。抛＝抛て、根拠。巢窟＝木の上や山の穴の中に住む。姦凶＝姦賊、悪

者、悪人、凶悪。逞＝とる、早い解く、逞しい、勢いを思つまにする、放す。公宮＝公舎「一瞰俯＝高所から見下ろす。盡＝盡す、尽きる、終わる

無くなる。伐＝木を伐る。匠工＝大工等。功＝竣功、工事を終える。爾後＝その後、以来。政和し＝政治が安定して。雍＝頂く、助ける、和らぐ、ふ

さく。存亡＝存在か滅亡、生死。循環＝めぐり廻つて。窮＝困窮、窮まる。一朝＝一朝一夕、一朝一夕。祝融、太古の神話時代の神の名、火

を司る神。転じて火事、火災。遭＝遭つ、遭遇。繞＝繞、まどわる。往事＝昔、過ぎし事、先に、昔の事。茫茫＝ぼうつとしてはっきりしないさま、

広々と果てしないさま。飛鴻トウ＝鴻が飛ぶ、おとり、ひしうい雁、雁の最大種。形勢ケイセイ＝地勢、形状、状勢、成り行き。熟すジュク＝成熟、機会が熟す。雙瞳シュウドウ＝双の瞳、両方の眼。凝しウツル＝瞳を凝らす、じっと見る。城郭シヤウカク＝城の堀や石垣、外郭。戎シヤウ＝戎、夷狄、禦ゴ＝制御、防く、守る。百年ヒヤクニヤウ＝二百年。昇平シヤウヘイ＝世の中が穏やかに治まっていること、戦乱時代から抜け出て太平に到るまでの上り坂の平和なじだい、太平の意。刀弓トウキウ＝刀と弓。廢止ハイシ＝廢止。城山シヤウサン＝城を築いてある山。干陞カンシヤウ＝城外の水のない掘り、空堀、掘り。舊蹤キウソウ＝跡、履き物、つつかけ、草履の類、つまらない物。鬱々ウツツ＝鬱然、気が塞ぐ。碧宮ヒヤクキウ＝青い空、高く紺碧の空。映エイ＝映える、映す。曷カク＝なに、なんで、いずくんぞ、なんの、なぜ、どうして。蒼々ソウソウ＝青々と茂るさま。盤山紅バンサンキウ＝盤山が紅に。實相院裡ジツサウインの鐘シヤウ＝實相院の鐘の音。

通釈 岩国の山どうして其の董、楽しく牛がたくたくと歩くさまに山の形が似ている、私に隣家の一人の老人が

語る、昔殆ど今日と同じに、山には他の樹木はなく皆金に成る松の木、松の木空に連なり緑青々と茂っていた、昼間でも尚暗く路も通らず、ムカデを住まいとし蛇や龍が棲む、その頃の才徳、の有る人は聡明にして、用心深い追い剥ぎや乱民がこの中に逃げ隠れた、ここを拠点として凶悪な姦賊として勢いを欲しいままにする、公舎を高所から見下ろして攻めると、松の木を全て伐採して大工に下げ渡すと、命令は政府の為に速やかに伐採を終えた、それ以来政治が安定して時に民も安らぎ助かる、五日に一度の雨十日も風が吹き、存在か滅亡か巡り廻って元々尽きることがない、政府一朝にして火災に遭う、松材煙と化して飛んで空に昇る、盤山の峰また峰を巡り散ってゆく、過ぎし昔の事ばおとしてハッキリしないで鴻オウが飛ぶようなもの、盤山動かず高く且つ重い、成り行きや情勢を良く見て双方の眼を凝らせば、城の堀や石垣を築くに宜しく以て夷狄を防御する、百年ヒヤクニヤウも世の中が穏やかにおさま

って刀と弓を廃止する、このような形勢や情勢は蓬が茂るに任すようなもの、君見給え城を山の城を、またまた空堀空しくつまらないものを余す、ただ見る言い松の木鬱然と青空に映える、或いは童わらわは或いは好んで任務に従わないのか、昔を懐かしみ今に思えば感じるどうして終わる。城山は青々として盤山は紅である、日が落ちて實相院の裡の鐘が鳴る。

48 余姉阿琴

十有七回忌辰、供香華墓下、

淚餘賦此、阿琴以重陽

下世阿琴妹名菊、

予号五竹故句中及此、

君於九日入黄泉

屈指匆匆十七年

翠竹黄花依舊在

秋風淚灑墓門前

滿城風雨使人愁

獨把香華上古丘

黄菊唯餘一枝在

余の姉阿琴

十有七回 忌辰香華を墓下に供す、

淚餘り此に賦す、阿琴 重陽を以て

世を下る、阿琴 妹 名 菊、

予 五竹と号す故に句中 此れ及ぶ、

君九日に於て黄泉に入る

指を屈すこと匆匆と十七年

翠竹 黄花 舊に依つて在り

翠竹 淚 灑ぐ墓門の前

城 風雨に満ちて人をして愁い使む

獨り香華を把つて古丘に上る

黄菊 唯だ餘す一枝 在り

依稀十七年前秋

依稀す十七年前の秋に

語釈

阿琴あこと＝南部五竹の姉。菊きく＝南部五竹の妹。忌辰きしん＝親の命日。忌日いじつ。香華かうげ＝線香や花。墓下ぼかに供す＝墓前供す供える。重陽じゆうやう＝陰曆九月九日。この日、九は陽の数で九が重なるから重陽と言つ。黄泉わうじん＝地下の泉。死者の行く所。黄泉に赴く旅人、死者。指屈さしひやくす＝指折り数える。匆々そうそう＝忙しい、慌ただしさま。翠竹すいさく＝緑の竹、五竹を指す。黄花わうげ＝黄色の花、黄菊、菊を指す。舊きう＝旧、古い。秋風しゆうふう＝秋の風、涼風。淚灑なみだ＝涙を流す、涙をそそぐ、溢れる。墓の門前もんのまへ＝墓前。滿城まんじやう＝城に満ちる、街に満ちる。風雨ふうう＝風や雨、嵐。愁しゆう＝愁う、憂愁、思つ。把はし＝把握、握る、掴む。古丘こきゆう＝土を盛り上げた古い墓。上のぼる＝あがる、参る。黄菊わうきく＝黄色の菊。一枝いちし＝一と枝。依稀いき＝稀、珍しい、良く似る。

通釈

私の姉阿琴、十七回忌の命日線香や花を墓前に供える、涙が溢れここに賦を詠む、阿琴陰曆九月九日重陽の節句に世を下る、阿琴の妹名は菊、私は五竹と号す、故に句中これに及ぶ。君九日において黄泉に赴く、指を折ること忙しく十七年、緑の竹(五竹)黄色の花(菊)二人は今もこの世に在る、折から墓前に秋風が吹き涙がそそぐように落ちる、城下を満たす風雨は人に悲しみを増し、独り香華を把つて土を盛り上げた古い墓に上ると、黄色の菊がまだ一枝残だけ残して、良く似ている十七年前の秋が一入俵ばれる。

49 製枕五首

せいちんごしゅ
製枕五首

世間何人能用予

せけん なにひと
世間 何人たり能く予を用う

今從杜門可親汝

いま づら どもん かの せんと ぬ
今 從り門を杜して從い汝親む可し

遮不莫夢見周公

おほ ざる 夢 みる せいこう
遮不莫れ夢に周公を見ず

一部周禮付嚙語

いちぶ せいらい つけ せりご
一部の周禮嚙語に付す

不易三公此一枕

えき さんこう こと ひとつ ちん
三公 易ならず此の一枕

何論明月與鳴廉

なに ん げん せいげつ とも なる せん
何んぞ論ぜん明月に鳴廉ととも

朝天宰相衝風雪

あしたの さいしやう ふうせつ を せう
朝天の宰相 風雪を衝き

人在暖閨猶黒甜

にん だんけい なる 猶 ぐろあま
人は暖閨に在りて猶 黒甜なり

夢見仙人陳搏公

ゆめ みる せんじん ちん ぼく こう
夢に仙人を見て公を搏えて陳べる

惠予一枕厥材桐

めぐり ひとつ ちん せいの せい
予に恵む一枕 厥材の桐

世間富貴黃梁夢

せけん ふうき じやうりやう ぼく
世間の富貴 黄梁の夢

好向名山用睡功

この せい ほう せいざん しよう ずいこう
好し名山に向つて睡功に用いん

不獨林逋結夢難

不獨的林逋 夢を結び難し

斬人更有老阿瞞

人を斬り更に老いて瞞に阿り有り

試看世上浮雲者

試に看る世上の浮雲の者

就與先生一枕安

就いて先生と一枕安んずる

警枕笑他君実勞

枕を警めて笑つて他た君の勞を實とす

華胥國裡世堪逃

華胥の國裡に世を逃に堪え

道高五丈吾何必

道高く五丈 吾れ何れは必ずしも

自此睡魔十丈高

自ずから此れ睡魔十丈 高し

語釈

世間 世の中。何人 何人、幾人、誰。能 能く、良く。杜 門を閉じる、塞ぐ。汝 前、そなた。親 親、親む、仲良くする。遮 遮る、遮蔽。莫 暮れ、ない、莫れ。一枕 一の枕、一眠り。周公 文王の子で武王の弟、武王の子成王を助けて周の制度文物を定め周王朝の基礎を築いた、孔子の理想とした聖人、周を治めたので周公と言つ。周禮 十三經の一つ周公が周代の官制を記したものと云われる、周官とも言つ。嚶語 讒言、寝言戯言。三公 臣下として最高の三つの位、周では太師、太傅、太保を言つ。易 易經。明月 中秋の明月、満月。嗚 嗚呼。廉 角、部屋の隅、角が立つ、鋭い調べる、恥をしる、潔い、易い、細かい。天朝 朝廷。宰相 天子を補佐して百官を統べる大臣。風雪 風や雪、年月、敵しい。衝 衝く、衝突。暖閣 暖かい寢や、暖かい婦人の部屋。猶 猶予。黒甜 甘い、黒糖。仙人 山人、俗界を離れて山に入り、不老不死の術を修めた人、俗界を離れた高尚な人。搏 捉える、うつ。陳 述べ並べる。世間 世の中。富貴 富と名譽、位が高い。黄梁 粟の一種、人生の儂いこ

と、廬生が宿屋で、主人が粟飯を焚いている短い時間に、富貴を極めた一生の夢を見たと言つせつわによる、枕中記による。逋ト逃れる、逃げる、隠れる、とらえる、税金を払わない。老阿瞞オマン阿瞞、曹操の幼名、老いた曹操。阿ア諂ト諂トう、寄りかかる。瞞マン騙す、欺瞞。試シ試シに試みに。一枕イツツン一夜の枕、一眠り。世上セウジヤウ世間、世の中。浮雲者フウウンジャ雲のように浮かび漂うような生活をする、仙人。安アン安心、安らか。警ケイ警戒、戒める、備え、注意。勞ラウ働く、努める、勤勞、ねぎらう、勞る。華カの裡リ華カ、中国、晉國シン晉國、戦国時代の七雄の一つの國、韓、魏、趙、燕、齊、楚、秦の七國、楚の屈原が前三四三頃汨羅に投身す、離騷。堪カン堪タる、堪忍カンニン。五丈ウシヤウ五十尺、一丈は長さの單位、十尺、約三米。睡魔スイマ眠氣、眠氣を誘つものを魔物に譬えて言つ言葉。十丈ジュウシヤウ約百尺。

通釈 世の中誰が良く吾を用いる、今から門を閉ざして汝と親しむが良からう、そつであれば有れ夢に孔子の理

想とした周公を見ない、一部の周の官制は讒言か寢言である。臣下として最も高い三つの位容易でないこの一眠りを、どうして論じよう満月にああ共に恥を知る、朝廷の天子を補佐し百官を統る人厳しさを衝き、人は暖かい婦人の部屋に在りて尚甘いものである。夢に仙人を見て三公を捉えて述べる、私に恵む一眠りその材料の桐、世の中の富と名譽は儂い人生の夢のようなものである、好ましい名山向かつて眠る効に用いよう。独りでなく林を逃れ隠れる夢を結ぶことは難しい、人を斬り更に騙すのに諂トいがある、試みに見る世間の雲のように浮かび漂う生活をする者仙人、共に先生に就いて一夜の枕に安んじる。枕を戒めて笑つてまた君の勞ラウいを実ミとする、中国楚の國の裡を世間から逃げるのに堪えて、道は高い五丈と吾れ何れは必ずしも、自ずから眠氣を誘つ悪魔十丈と高し。

懷かいを書しよす

富貴非吾願

富貴ふうき 吾われが願ねがうに非あらず

浮生水上漚

浮生ふせい 水上すいじょうの漚あわ

山川活周易

山川さんせん 周易しゆつえきを活かし

詩賦我春秋

詩を我しゆんじゆうれは春秋しゆんじゆうに賦ふす

一枕千金子

一枕いつちん 千金せんきんの子す

三杯万戸侯

三杯さんぱい 万戸ばんこの侯こう

何餐盜碾粟

何とつてんんぞ盜碾あわ 粟さんを餐さんせんや

寧為於陵蚯

寧いずくんぞ 陵蚯りょうきゆうに於なて為なさん

語釈

懷ふいを書かす 懷ふいを書く。 富貴ふうき 金持かねもちちとと身分みぶんの高い人。 浮生ふせい 儂おろそい人生じんじゆう。 漚あわ 泡あわ、うたかた、浸ひす、長い間水まに浸ひける。 活か 水みづが勢いきり良く

流ながれる、生き生きしてゐる、活いきる。 周易しゆうい 周しゆうの易経いけい。 春秋しゆんじゆう 春秋時代しゆんじゆう。 一枕いつちん 一睡いつしゆい。 千金せんきん 千せんの金子きんす 千兩せんりゆう、沢山さくざんのお金かね。 三杯さんぱい 三倍さんばい。 万戸まんこ候こう 漢代まんだいの一

万戸まんこ、住民しゆみんを領有りやうゆうする列候れつこう、小せうさい列候れつこうは三さん、四し百戸ひゃくこ。 餐さん 食たべ物もの、こ馳走ちしゆう、食たぶ、飲のむ、美み食じゆう。 盜碾たうせん 盜たうんで挽ひく、盜たうんで粉こなを挽ひく。 寧い 安やすんじる、

むしろ、なんぞ、いずくんぞ。 陵蚯りょうきゆう 陵りょう、小せうさな丘かみ、蚯きゆうは大きな丘かみ。

通釈 金持ちや身分の高いことを私は願うのではない、儂い人生である水の上のうたかたの泡のよう、山や川周

の易经を活かし、詩を私は春秋に賦す、一睡千両と沢山の金、三倍の一万戸を領有する諸侯、どうして盗んで粉を
挽いた粟を食べるのか、むしろ小さな丘や大きな丘に於いて治めよう。

51 送藤子賞之江門

藤子賞 之れ江門に送る

雲端雪白富山秋

雲端の雪白し富山の秋

欲賦佳詩馬且留

佳詩を賦欲す馬且つ留め

天下舊傳玉翁句

天下に舊く傳う玉翁の句

問君定得嚙馨不

問う君定し嚙馨得ず

子賞云此行得富山佳詩而歸

子賞云う此行得て富山の佳詩而て歸る

以上係二十七歳以前所作

以上係二十七歳以前の所作

語釈

藤子賞（ひたして）後藤子賞 後藤敬臣。江門（こうもん）江門。江戸。雲端（うんたんとん）雲の端。富山（ふさん）富山。佳詩（かじ）佳作の詩、良い詩。賦（ふ）詩を賦詠む、詠う。馬且つ留め

馬を暫し留め。天下（てんか）國中、世界、世間。舊（きゅう）舊く、古く。玉翁（ぎよくおう）玉乃九華、五竹の潘校養老館での師範、又は肥後の秋山玉山かも。君きつと、決まって。嚙（ねい）やすらか、なんぞ、いずくんぞ。馨（けい）香、馨（かあり）香、馨（かあり）。

釈文 秋の富士山 雲の端にかかる雪も白い、良い詩を詠みたくて馬を留める、これは天下に旧くから伝えられる玉乃九華（又は肥後の秋山玉山かも）翁の句である、君に問う定めしどうして馨を得ることは

トホホニシ。

半生飄蕩一閑人

半生の飄蕩 一閑人 はんせい ひやうたう いちかんじん

負笈去遊九國春

笈を負い去りて遊ぶ九國の春に、 きゅう お さ あそ くこく

三寸霜毫無處試

三寸の霜毫 試す處も無し さんすん しもじょう ため ところも無し

要驚筑海紫山神

驚きを要す筑海お紫山の神 ちよくい ちうかい しん

語釈

半生はんせい 人生の半ば。飄蕩ひやうたう 水が流れ漂うように遊ぶ。一閑人いちかんじん 一人の暇な人。閑人。毫ごう 細毛、長く鋭い毛少し、僅か、細かい。笈きゅう 笈

笈箱あひばこ、書物等入れて背竹製の箱。九國くこく 九州。筑海ちくかい 筑紫の海、九州の海。紫山しん 筑紫の山、九州の山

通釈 人生の半ば水が流れ漂うように遊ぶ一人の閑な人、書物など入れて背負う竹製の箱を負い去り行き遊ぶ九

州の春に、三寸の霜少しも試す処もない、驚くべし筑紫の海や筑紫の山の神。

53 壇浦懷古

だんのつら かいこ
壇浦懷古

千年往事遂雲飛

せんねん おつじ くも と
千年の往事 雲 飛ぶを遂う

纒説先皇我涙霏

わすか せんこう と わ なみだ ひ
纒に先皇に説く我が涙の霏たるを

春海茫茫青一碧

しゅんかい ぼぼぼろ あお いっぺき
春海は茫茫として青 一碧

不知何處葬龍衣

しじゆ いすこ りようい ぼつむ
不知何處に龍衣を葬るを

語釈

壇浦だんのつら＝山口県下関市沖、源平壇浦の合戦、古戰場 懷古かいこ＝昔のことを思い出す。往事おつじ＝昔のこと、過ぎ去った、事柄。遂ついで＝遂に逃げる、

終える、従つ、逃げる。纒わすか＝僅か、稍、やつと、少し。先皇せんこう＝先の帝、安徳天皇。涙が霏なみだ＝涙が霏々と流れる、霏ひ、霧、雨や雪の降るさま、雲の

飛ぶさま。春海しゅんかい＝春の海。茫茫ぼぼぼろ＝広々と果てしない、ぼつととしてはつきりしないさま。青一碧あおいっぺき＝青また青、青一色。龍衣りようい＝天子の着物、安徳天皇の

衣。葬るぼつむ＝葬、申つ。

語釈

千年の昔の事を雲が飛ぶのを遂つよつに、僅かに安徳天皇に説く私の涙が雨が降るよつを、春の海は広々

として果てしなく青一碧である、知らない何処に天子の衣を葬つてあるや。

為客纒及三十里

かく な わすか およ
客を為し纒に及ぶ三十里

思家疑是路三千

うたが こ みち
家思い疑うらくは是れ路三千

郷關回首知何處

きょうかん
郷關に首を回らせば知んぬ何れの處ぞ

三十六灘横暮烟

たん ほえん よこ
三十六灘 暮烟が横たわる

語釈

纒わすかざん 纒、僅か、稍、やっと、少し。郷關きょうかん 郷里の村の門、郷里。何處いずこ 何處、何れに。灘たん 灘、瀬、早瀬、水浅く岩石が多くしかも流
れが急で舟行に危険な所、水が奔流するさま。暮烟ぼえん 暮れに立ち上る煙。

通釈

旅をして僅か三十里歩いた、家を思い疑わしいこれは三千里の道では、郷里の門こゝに頭を巡らせば知りた

い何処いで有ろうか、三十六の早瀬に暮れに立ち上る煙が横たわる。

55 赤間關航海抵内裡風波

殊悪有感而作

あかまがせきこうかい あた いき ふうは
赤間關航海に抵る内裡風波

こと
殊ごとく悪く感に有りての作

飽歴世間風波嶮

へき ぼつ せけん ふうは けわ
歴に飽して世間 風波 嶮し

海上風波却不嶮

かいじょう ふうは かえつ けわし
海上の風波却て嶮からず

世間風波無定期

せけん ふうは ていぎ
世間の風波に定期 無し

海上風波一時嶮

かいじょう ふうは 一時 けわ
海上の風波は一時嶮し

二月南子渡赤關

にがつ なんし せきせき
二月 南子 赤關を渡る

璃盤捧出鎮西山

りばん ほうしゅつ ちんせい
璃盤 捧出す鎮西の山

船及海心風忽怒

ふね かいしん たちまちいか
船は海心に及んで風 忽 怒り

璃盤忽碎山變顔

りばん たちます くだ かあ へん
璃盤 忽 砕け山の顔 變す

不幸一風若纒西

ふこう いっふう わすか にし こと
不幸にも一風 纒に西の若し

便到高麗百濟間

すなわ こうらい いた くだら かん
便ち高麗に到りて百濟の間

日暮舟達内裡驛

にちぼ たいり えき
日暮 舟は達す内裡の驛

須臾風定海如席

須臾 すゆ 風定りて海 さたま 席の如し うみ せき ごと

蒼海茫茫不見山

蒼海 そうかい 茫茫として山を見ず ほうほう

四十八灘一帆白

四十八の灘 なだ 一帆 いっばん 白し しろ

語釈

赤間關あかまがせ 山口県下関市、源平の古戰場。航海しうかい 舟で海を渡る。抵てい 抵抗、押しつける、逆らう、任せる。内裡ないぢり 天子の宮殿、ここでは赤

間宮の在る赤間關。風波ふうな 風と波。有感おんかん 感じる所が有り。飽歴ほうれき 飽きる程歴訪する。世間せけん 世の中。定期ていぎ 時期の定め。却かえ 反対に退ける、拒む。

南子なんし 南部五竹。赤關あかせ 赤間關。璃盤りばん 美しい食器大鉢。罌い 罌、洞を巻く。捧出ほうしゅ 捧げ持ち、出す。鎮西ちんせい 九州。一風いちふう 一陣の風、一つの風体。若纒じやくけん

に 僅かに、ほんの少し。便べん ちち 到いた 船便で到達する。高麗こうらい 唐代の朝鮮。高麗こうらい 百濟ひやくけい 新羅 三国の一つ。百濟ひやくけい 唐代の朝鮮三国の一つ。驛えき 宿場

須臾すゆ 暫く、暫時、少しの間。海席かいせき の如し 海が静かで座敷のよう。定りさだ 決まり、定め。蒼海そうかい 青い海。茫茫ほうほう 広々と果てしない、ぼつととしてはつき

りしない。灘なだ 灘瀬、早瀬、水が浅くて岩石が多く、しかも流れが急で舟行きに危険な所、水が奔流するさま。一帆いっばん 一艘の帆。

通釈 楽しみながら歴して世の中の風波は嶮しい、海上の風波は反対に嶮しくない、世間の風波に時の定めがな

いが、海上の風波は一時嶮しい、二月私は赤間関を渡る、美しい大盃を捧出す九州の山、舟は海の中程に進み風が

急に怒り、美しい大盃は忽ち砕け山の姿が変わる、不幸にも一風僅かに西のようである、則ち高麗と百濟の間に到

る、日暮れに舟は内裡の宿場についた、少しの間に風が収まり海は静かで座敷のようである、蒼い海は広々として

果てしなく山も見えない、四十八の灘に一つの帆が白い。

56 小倉道中次同遊杏所韻

小倉道中同遊 杏所の韻に次す

豊城日出發豊城

豊城 日出 豊城を發つ

到底易催羈客情

到底 催し易き羈客の情

今夜不知何處泊

今夜 知ず何れの處にか泊さん

筑山遥隔海波明

筑山 遥かに隔てて海波 明らかなり

語釈

小倉ちくわ 北九州市。道中みちちゆう 旅の途中。杏所きんじよ 宮宅杏所、医者。同遊どうゆう 一緒に旅をした。韻いん 詩歌の句、行の末や辭締めに繰り返し置く、

類似の発音、韻を踏む。豊城ほうじやう 豊後、大分県。日出ひで 豊後、大分県、日出藩木下家。發つたつ 發、出發。到底たいてい どんな方法や手段を尽くしても、実現出来ないと思われる、あり得ない、不可能。催さい 催す、開催。羈客きかく 旅客。旅人。何處いここ 何処、何れに。筑山ちくさん 筑紫の山。海波かいぱ 明し 海の波が月で光る。明るあかる。遥はるか 隔る、 遠く離れた。

通釈

豊後、大分県の日出豊城を發つ、尽くしてもあり得ないが催し易い旅人の情、今夜は知らない何処に泊

まるのであろうか、筑紫の山遙かに隔てて海の波が月に照らされて明るい。

57 博多河島養林招飲酒間賦而似之 博多 河島養林に招れて飲す酒間にして之を似て賦す

神丹靈藥奏奇巧

神丹の靈藥 奇巧を奏す

君是當今秦越公

君是れ當今の秦 越公

家住青松十里外

家は青松に住して十里の外

身忙黄杏一林中

身は忙しく黄杏 一林の中

醴醪夜願霸臺緑

醴醪の夜は願に霸臺の緑

魚鰕春美紫溟紅

魚鰕の春美し紫溟 紅

不獨妙方驅二豎

獨りならず妙方に二豎を驅る、

好詩除瘡少陵風

詩を好み瘡を除く少陵風 少なり

語釈

博多 北九州市博多。河島養林 医者で宮宅杏所の師。似す 似せる、示す。神丹 丸薬、仙丹、仙人の薬。靈藥 神仏より授かった靈験

顯著な薬。奇巧 奇妙な巧。奏める 奏す、奨める、差し上げる、上奏、奏でる。當今 今時。秦越公 戦国時代秦國の君主、春秋時代越國の君主。十里

四十キロメートル。トル。身忙 忙しい身体。黄杏 黄色すいた杏。醴醪 濾した甘酒。願 懇ろ。夜願 夜長い。霸臺 物見櫓、台、高殿に昇る旅人

魚鰕 魚や鰕。紫溟 暗い紫色に黒ずんだ大海。紅 紅紅。妙方 良い方法。二豎 病魔、病気のとえ。春秋時代の故事に依る。驅 馬を鞭打つ

て早く走らせろ、駆ける。獨^{どく}〓独り。瘡^{そう}〓瘡、瘡^{そう}、童病^{どうびょう}み、今のマラリヤ。陵^{りょう}〓大きい丘。

通釈 仙人の薬で靈驗顯著な薬珍しい効能を奨める、君これ今の世に戦国時代の秦國の君主や春秋時代の越國の

君主、家に住むは十里の外、身は忙しく黄色ずいた杏の林の中、濾した甘い酒の夜は憩ろに高殿の縁、魚や蝦^{えび}の春は美しい紫色に黒ずんだ海も紅い、独りでなく珍しく正に病魔が駆ける、詩を好み今のマラリヤを除く大きな丘の風が少ない。

發博多趣松崎途中有作

博多を發ち松崎に趣く途中作有り

筑山紫水作漫游

筑山の紫水 漫に游を作す

朝發霸臺旭影流

朝に霸臺を發ち旭影 流る

菅廟符傳今世駿

菅廟の符は傳う今世のに駿し

萱餅餅憶古時秋

萱餅 關憶の古時の秋

疎鐘落日觀音寺

疎鐘 落日の觀音寺

残瓦荒田都府樓

残瓦の荒田に都府の樓

陳迹舊蹤到處在

陳迹す舊蹤 到る處 在り

春風無限遠人愁

春風 限り無く遠し人を愁う

語釈

博多＝福岡市博多区。發ち＝出發。松崎＝。趣く＝往く、訪れる。途中＝道中の中程、道の半ば。筑山＝筑紫の山。紫水＝筑紫の川

や海。漫游＝漫然と遊ぶ、ゆったりと旅行する、心のままに方々を旅して廻る。霸臺＝見張りの台、關所。旭＝朝日。菅廟＝菅原道真の廟所、墓所。符傳＝道中手形、關所の通行証しるし、割符。驗＝証。萱餅＝わすれ草の餅、かんぞう、百合科の多年生、是を食べると憂いを忘れると言う、忘憂草、國字で、萱、關すすき。憶＝關所を記憶、覚える、思ふ。古時＝昔、古の時。疎＝疎ら。鐘＝鐘。落日＝日が落ちる、零落。觀音寺＝太宰府隣接の寺

残瓦ざんが 〓 毀れた残りの瓦。 荒田あらいで 〓 荒れた田。 都府とふ 〓 都の出先の役所。 樓ろう 〓 高樓、建物。 陳迹ちんせき 〓 述べる、跡を追いかける、足跡、古跡。 舊蹤きゅうじゆう 〓 旧の足跡、
事跡、物事のあとかた、行方。 春風しゅんぷう 〓 春の風。

通釈 筑紫の山や筑紫の川を心の儘に旅して廻り詩を作る、朝早く関所を発つと旭の影が流れる、菅原道真の廟

所の道中手形は今の世に伝える証あかしである、忘憂草の餅を食へ関所で昔日の秋を追憶する、零落した観音寺の疎らに
撞く鐘の音、毀れた残りの瓦に荒れた田に昔都の出先の役所の楼閣の、古跡や事跡の行方が到る所に在る、春の風
は限りなく遠い人を愁はしむ。

59 海中道

紫溟不波潑黛濃

一望茫茫豁心胸

海中之道是何道

一道横向紫溟衝

人傳天仙朝來往

或云海仙暮相逢

裳濡何待秦漢后

仙鄉可望不可從

天仙茫茫絕消息

海仙沓々無音容

落日低海帆影没

沙明一百里青松

海中道

紫溟く波ならず黛を潑して濃かなり

一望 茫茫と心胸を豁く

海中の道是れ何の道

一道横にに向いて紫の溟きを衝く

人は傳う天仙 朝來りに往くと

或は云う海仙暮に相逢つと

裳を濡らし何んぞ待せん漢后に秦めるを

仙郷望む可し従う可らず

天仙茫茫として消息を絶つ

海仙沓々として音容無し

落日の海に低れて帆影を没す

沙明らかに一百里の青松

語釈

海中道うみなかぢ＝博多湾と玄界灘に面した細長い半島。紫溟しじつ＝紫がかつた暗い海。黛あざみ＝黛、青黒色。濃のり＝濃やか、濃い。潑はす＝水が飛び跳ねる、水を散らし注ぐ、飛び散る。茫々ぼうぼう＝ぼつととしてはつきりしないさま、広々として果てしない、疲れたさま。心胸しんちゆう＝心中、胸中。豁かつ＝開ける、広く開けた谷、心が広い。衝しゅう＝要、要衝、当たる、衝く。天仙てんせん＝天の仙人。海仙かいせん＝海の仙人。暮くれ＝夕暮れ。裳濡れしやうぬ＝もすそ、下袴が濡れる。秦める＝奨める。漢后かんこう＝漢國の皇后。仙郷せんきやう＝仙人の郷。消息せうしき＝暮らしている様子、離れて居る人の連絡の有無、その筋の通。沓々くわくわく＝言葉の多いさま、早く行くさま、心の弛んださま。音谷おんたう＝声と形、姿、面影。落日らくじつ＝夕暮れ、日没。零落じやうらく＝低帆ていはん＝帆の低い舟。没すぼつ＝波に隠れる。沙明さめい＝白い沙が明るい。一百里いひゃくり＝約四百キロメートル。

通釈

紫がかつた暗い海の波は黛の濃い水を飛び跳ねる、見渡す限り広々として果てしなく心中が開ける、海の

中道これは何の道であろうか、一つの道が暗い海を衝いて向かい横たわる、人は伝えて云う天の仙人が朝来て往くと、或いは云う海の仙人が夕暮れに互いに会うと、下袴を濡らしどうして待たすのか漢の後に奨めるのを、

仙人の郷は遠くより望んで従ってはならない、天の仙人はぼつととして暮らしている様子も知れない、海の仙人は早く行きその面影もない、夕暮れの海に帆影を低く垂れて消えていく、白い沙浜が明るく遠く百里も青い松原が続く。

60 入南關示杏所

南關なんかんに入りて杏所きょうしよに示す

筑後雲連肥後雲

筑後ちくごの雲 連らなりて肥後ひごの雲に

語言漸覺聽難分

語言ごげん 漸よつやく覺おぼえるも聽き 分け難がたし

去家逾遠愁逾劇

家を去りて逾いよよ遠つれし愁いよい逾はげよ劇げし

猶幸鄉人獨有君

猶きようしんを幸ひといに鄉人きみ 獨り君 有りて

行盡鎮西山又山

行き盡つくす鎮西ちんせいの山又た山

春風二月入南關

春風しゅんぷう 二月 南關なんかんに入る

不知識家今達否

家を識しるに知らず今 達する否や

回頭落日白雲間

頭こづへを回めぐせば落日らくじつ 白雲はくうんの間かん

語釈

南關なんかん＝熊本県南関町、肥後南の関所、杏所きょうしよ＝宮宅杏所、医者。五竹と共に岩国から旅に出た。筑後ちくご＝福岡県、久留米藩、三池藩、柳川藩。

肥後ひご＝熊本県、熊本藩、人吉藩。語言ごげん＝言葉、方言。漸よつやく＝やっと。聽き分け難がたし＝聞き分け難い、言葉が判り難い。逾いよ遠つれし＝いよいよ遠い。愁いよい逾はげ劇げ＝思

いよいよ激しくつる。猶なほ＝更に。郷人きょうじん＝里人、地元の人。盡つくす鎮西ちんせい＝鎮西、鎮西九州を全、て見て廻った。獨り君ひとりきみ＝独りの友。春風しゅんぷう＝春風、

蕩、春の風。落日らくじつ＝日没、夕方、夕暮れ。識しず＝知らず、覚えす。白雲はくうんの間かん＝白い雲の間。

通釈 筑後の雲も肥後の雲に連なって、語る言葉もやつと覚えたが聞き分けが難しい、家を出てからいよいよ遠

く望郷の念いよいよ激しく、尚幸いに郷の人独り君がいて、行き尽くした九州の山また山、春の風吹く二月肥後南
の関所に入る、家を識^しっているが所在は知らない今着けるかどうか、頭^{こぶ}を巡^{めぐ}らせば夕陽は白雲の間にあり。

61 入熊城

熊城に入る

地暖早開驛路櫻

地 暖かく早に開く驛路の櫻

香雲擁我入熊城

香雲 我を擁して熊城に入る

満目韶光豈不好

満目の韶光 豈 好からず

春風渾是故園情

春風 渾て是れ故園の情

語釈

熊城。熊本城下、市内。地暖。暖かい土地柄、土地が早く暖まる。驛路。宿場の道、街道。香雲。花がすみ、馨の良い雲、花の一面に

咲いたさま。擁。抱く、包む、抱擁。満目。目いっぱい満ちる、目の中にありありと浮かんで離れない、見渡す限り。韶光。美しい光。豈。どうし

て、なんと、それ、ほとんど、たのしむ。春風。春に風。渾たり。渾身、力が漲る、水が滾々とわきでる、すべて。故園。故郷、古い名園。

通釈 土地柄も暖かく宿場の街道の櫻も開いている、花が一面に咲き香りに包まれて熊本に入る、見渡す限り美

しい光どうして好くないのか、春の風全てこれ故郷を思つ情にある。

脚疲体倦苦途長

あしつか てあし つか みちのり
脚疲れ体 倦れ途に長く苦む くるし

山鹿驛頭己夕陽

やまが えきとう すて せきよう
山鹿の驛頭 己に夕陽

脱鞋直浴温泉去

わらじぬ
鞋を脱ぎ直に温泉に浴して去れば

今夜何煩命燂湯

な わすら せんゆ めい
今夜何んぞ煩わしき燂湯を命ずる

語釈

やまがえき 山鹿驛熊本県、肥後山鹿の宿場。体倦けん 体が怠だるく、倦怠。途長とく 中は長く、道中はまだ遠い。夕陽ゆうよう 暮れ、夕日、夕方。鞋けい 鞋。直たぢ に 直ちよくに、浴よくす 浴よくびる。煩はん 煩はんう、病やまが気、煩はんわしい 燂せん 燂せんかしく、米こめを炊かく、燃もえる、輝かがく、暖ぬかい。

通釈 脚が疲れ手足も疲れて長い道中に苦しむ、山鹿の宿場に立つ既に夕陽となっている、草鞋を脱ぎ直ちに温

泉を浴びて去れば、どうして煩わしい米をかしく湯を求める。

63 十里松

十里松 じゅうりまつ

休曾遺芳春翠濃

休曾の遺芳 春翠 濃かなり
きゆうそう いほう しゅんすい 濃かなり

林間吟到夕陽春

林間 吟じて到る 陽春の夕
りんかん ぎん 陽春の夕

豊家忽遂茶烟滅

豊家 忽ち茶烟 滅するを遂げ
ほうけ たちま さいん 滅するを遂げ

千古青々十里松

千古 青々たり十里松
せんこ せいせい じゅうりまつ

語釈

十里松 長い松並木、松林。休曾 千利休。

遺芳 死後に立派なものを残す、名声、詩文、書画など。春翠 春の緑、黄緑、萌え黄色。

濃し 濃い、濃か。林間 林の間。吟 吟、詠う朗吟。

陽春 春の太陽、麗らかな春。豊家 豊臣家。忽ち 突然、直ちに、俄に。茶烟 煙り。遂

に滅す 終いに滅亡した。千古 千年と古い、大変に古く。青々 青々と茂る、栄える。

通釈 千利休の名声は春の緑よりも濃い、松林の間吟じて麗らかな春の夕べに到る、豊臣家忽ち茶煙りとともに

終いに滅亡した、千年と大変古く青々と茂り栄える十里松。

過熊城有感

熊城を過りて感有り

藤公逝後久昇平

藤公の逝後 久く昇平す

歳々紫苔上搦生

歳々 紫苔は搦生に上る

傷心銀杏一株樹

傷心の銀杏 一株の樹

枝葉已齊百雉城

枝葉は已に齊し百雉城

語釈

熊城 || 熊本城下、市内。過す || 過こす、暮らす、過ぎる。藤公 || 加藤清正公。逝後 || 逝去後、死後。久く || 長らく。昇平 || 平和な時代、

太平。歳々 || 年々。紫苔 || 紫の苔。搦生 || 数える、浚つ、浚生溝。傷心 || 傷ついた心。銀杏 || 銀杏、銀杏。一株 || 一株。枝葉 || 枝と葉。齊し || 同じ

く。 || 百雉城、熊本城の別名

語釈

加藤清正公の逝去後長い間平和な時代が続いた、年々紫の苔が浚つても上に生える、傷ついた心の銀杏一株

の樹、枝や葉は既に百雉城と同じ高さに伸びている。

65 宮地旅館作

みやじりよかん
宮地旅館の作

新緑帯烟蔭小軒

しんりよく けむり
新緑 烟を帯て小軒に蔭り

客亭蕭瑟斷人魂

きやくてい しょうしつ
客亭 蕭瑟して人魂を斷つ

好山咫尺登難得

こうざん じせき のぼ
好山 咫尺 登るも得 難く

雨暗阿蘇山下村

あそ
雨は暗し阿蘇 山下の村

語釈

しんりよく 新緑 若葉 烟を帯す けむり 煙りを横たえる。 しょうけん 小軒 小さな家。 きやくてい 客亭 旅館。 しょうしつ 蕭瑟 秋風の吹くさま、物寂しいさ。 じんこん 人魂

|| 人魂。 咫尺 非常に近い距離、短い簡単なこと。

通釈 若葉はもやって小さな家に陰りをつくる、旅館は物寂しく人魂を断つ、好きな山はとても近い所に在るの

に登るのが難しい、雨が降り暗い安蘇 山下の村。

66 寶刀引

君不見阿蘇宮司寶刀長、

其長三尺三寸強

作之者誰來國俊

水截蛟龍陸虎狼

其先惟澄勇且強

提之嘗戰多々良

塵戰奮勇向無敵

千揮万霍折刃鉞

戰了善刀立四望

忽見有物飛煌々

須臾來止刃缺處

漸々相合無痕傷

寶刀引

君見えず阿蘇宮司の寶刀長ず、

其の長さ三尺 三寸 強う

之作る者誰れ來國の俊

水の蛟龍 陸の虎狼を截つ

其の先 惟澄 勇にして且つ強し

之を提げて嘗て多々良で戦う

塵戦 勇を奮えば向うところ敵 無し

千揮 万霍の刃鉞を折る

戦い了り善刀を立てて四望すれば

忽ち見る物 有り飛ぶ煌々

須臾 來たり止む刃 缺し處

漸々 相い合して痕傷 無し

惟澄異之扇手將

これずみ こと まさに おうぎ
惟澄 之れは異なりと將に扇を手に

撲落螢火一點光

けいか ほくらく
螢火を撲落すれば一點の光

螢丸之名自是得

ほたるまる
螢丸きまりて之の名 自からはを得たり

微瑕猶存一条霜

かすか
微なる瑕 猶を存す 一条の霜に

或云缺刃落戰場

けつじん せんじょう
或は云う缺刃 戰場に落とすと

熒如螢火點水楊

ともしび
熒の如き螢火 水楊に點ずれば

由是遂以螢丸號

よ こ つい も
由し是れ遂に以つて螢丸と號す

此說孰是孰荒唐

たれ ぜ たれ
此の説 孰か是 孰か 荒唐か

二說兩存亦不妨

にせつ じゅうそん ま
二説の兩存 亦た妨ず

吾愛秋水似將

しゅうすい かん
吾れ愛す秋水の于 將に似たるを

為是四海昇平久

しかい しよつへい ひ
是れ四海の昇平 久しくを為さん

重襲空藏一錦囊

かさね ぶそ いちきん のう
重て襲つ空藏 一錦の囊

請看洋夷今陸梁

こ み
請つ看よ洋夷の今の陸梁

蠶食將及我扶桑

さんじよく まが わ ふうそう
蠶食して將に及ぶ我が扶桑

安得此刀提之去

安んじて此の刀を得て之れを提げて去れば

一時斬取泰西王

一時に斬り取らん泰西の王

語釈

寶刀引たからばやし 寶刀を引見する。阿蘇宮司あそのみやうじ 阿蘇神社の神主。三尺三寸強さんしゃくさんすんじやう 約一メートル余り。來國俊きこくにひ 名刀工。蛟龍けうりゆう 虬、みずち、水龍。截せつ

断つ、切る。虎狼ころう 虎や狼。惟澄ただあきら 武将、阿蘇神社の神官。嘗なげ かつて、是までに、試す嘗める。試す。多々良たたら 福岡県、多々良が濱の古戦場。塵戰ちんせん

戦い皆殺しにする。千揮せんき 千騎、千旗。万霍ばんかく 俄に広がる。煌々くわくくわく 明らか、きらきらと光る、輝く。刃鋒じんぽう 刀の切っ先。戰了せんりやう 戦いが終わり。四望しぼう

四方を良く見る。須臾しゆゑん 暫く、暫時、寸刻、少しの間。刃缺はなけ 刃の欠けた所。漸々ぜんぜん 次第に、徐々に、少しずつ。相合あひあ 合う。痕傷いんじゆう 傷跡が一致す

る。之異これい 異なり。これは變だ。撲りなぐ 叩き、払い落とす。螢火けいか 螢の火。一點光いってんくわう 一点に光る。螢丸ほたるたま 刀の名。微瑕びいけあ 微かな瑕疵、僅かな傷。缺刃けつじん 欠

けた。熒けい 灯火、ともしび、光明らか目が眩む、螢火。水楊すいよう 水場の柳。孰く 煮る、煮える、穰せう 周到、つまびらか、何れ。荒唐かうどう 言語が取り留めも

ない、でたらめ、荒唐無稽。秋水しゅうすい 秋の出水、秋の澄切った水、全て清らかなものたえ、一の心、研ぎ澄ました刀剣など、三尺秋水。四海しがい 四

方の海の内、四方の戎、四方の海、南海、東海、西海、北海。昇平しやうへい 世の中が穏やかに治まっている、戦乱時代から抜け出て太平に到るまでの登坂の

平和な時代、太平の意。重襲じゆうしゆう 衣服を重ねて着る。空藏うらぞう 空の蔵、空に蔵にす。一錦囊いっしんなん 錦で作った袋、詩を入れる袋、唐の李賀が良い詩が出来る度

に錦の袋に入れた故事による、他人の良い詩を褒める言葉。洋夷やうい 西洋の狄。陸梁りくりやう 蔓延る、跋扈、我がもの顔でのし歩夷。蠶食さんじき 蚕が桑の葉を食

うように、食い散らす。扶桑ふさう 神木の名、中国の東方日の出る辺りの海の中にある國、扶桑のある所日本。泰西王たいせいおう 西洋諸国の王。

通釈

安蘇神社の宝刀その長さは三尺三寸強、これ作る者誰かそれは來國俊、水を水龍、陸の虎と狼、宮

司の先祖安蘇惟澄武勇が有り且つ強かった、この宝刀を提げ昔多々良が浜で善戦した、皆殺しにと勇氣を奮い向か

う刃敵なし、千騎の兵俄に拡がり奮戦刀の切っ先が折れる、戦いが終わり刀を立てて善く四方を眺めれば、忽ちきらきら光り飛んだ物が有り、暫くして来て刃の欠けた刃に止まる、徐々に相合う傷跡がなく、これすみ 惟澄これは變だと
將に扇を手に、螢火を殴り落とせば一点の光、僅かに尚有る一條の霜、或いは云う刃が欠けて戦場で落ちたと、ともしび 熒
のように螢火が水辺の楊やなぎに点とれば、これ故に遂に以て螢丸と号す、この説誰か是認するか誰か取り留めもない出鱈目
というか、二説の両存をしても良いでは無いか、私は愛す研ぎ澄ました刀のように全て清らかなるを、これ海内四
方の太平が長く続くように、踏襲する空蔵の一つの錦で作った詩を入れる袋を、頼むから見てくれ西洋の夷狄の今
の我が物顔でのし歩くを、蚕が葉を蝕むように將に我が日本の國を、安心してこの刀を得て提げ去れば、一時に斬
り取る西洋諸国の王を。

67 觀古詔書引

古詔書引を觀 こしやうしよいん かん

闕宮寥落阿蘇宮

闕宮 寥落す阿蘇の宮 ひきやう じやうりやく あそ ぐう

唯有雄鷄鳴午風

唯だ雄鷄の午風に鳴く有り ゆうけい じゆうふう

拜神畢訪宮司宅

神拜し畢に訪ねる宮司の宅 かみはい ひつ たす ぐうじ

古殿叩扉名刺通

古殿の扉を叩き名刺を通ず こてん ひ たた めいし つう

慇懃請觀秘藏物

慇懃に觀るを請う秘藏物 いんぎん み こ ひざうぶつ

少間迎我一老翁

少間我を迎る一老翁 しやうかんわれ むかえ いさうおう

捧出兩函置案上

出で兩函を捧げて案上に置く い じやうかん せおけ あんじやう

其一黑髻一素桐

其の一黒髻に一素桐 こくまげう ぞうり

先開髻函盡詔宣

先に髻函を開き盡く詔を宣う まきゆつかん いたひひやく み「た」のり たま

々々一半屬蠹蟲

詔宣の一半に蠹蟲が屬 しやうせん いっはん とちゆうじゅう しちやく

纒辨正平興國事

纒に正平を辨じて國事を興す わざか しやうへい べん くにじ おこ

或徵軍兵或賞功

或は軍兵を徵し或は功を賞す あめご ぐんひやう ちやう あらゐ くにじ じやう

就中奇者假名字

中就なかんず奇きなる者は假名字かなじ

寫出綸言文亦工

寫うつし出だす綸言りんげん 文ぶん 亦また工たくみ

傳後奈良院宸筆

傳つたう後ご奈良院ならいんの宸筆しんひつなりと

擬得椒房極婉容

椒房しやうぼうに得うるを擬なすも婉容えんようを極きわむ

次開桐函多教令

次つぎに桐函とうかんを開ひらきしは教令きやうれい多おほし

筆筆渾帶戰爭蹤

筆ひつひつ 渾すへて戰爭せんそうの蹤あとを帶おびる

尊氏文辭最簡古

尊氏たかうじの文辭ぶんじは最も簡古かんこなり

二寸絹素書正鋒

二寸ふたすんの絹きぬに素書そしよ 正鋒せいほうなり

此外古書紛無數

此この外古書ほかこしよ 無數むすうに紛まれ

更僕繼日看未終

更さらに僕しもへに日ひを繼つぎて看みること未まだ終はらずと

想昔宮司全盛日

想おもふ昔むかし 宮司みやうじ 全盛ぜんせいの日ひ

戮力王室精忠

王室おうしうに戮力りくりよく 精忠せいちゆうをともつす

爾時宮司貴且富

爾時じこ 宮司みやうじは貴かく且かつ富とむ

大廈高殿摩蒼穹

大廈たいいかの高殿こうてん 摩そつ蒼穹そうきゆうに摩あす

物換星移今異古

ものかわ 星移り今 古と異り

古殿扉朽紫苔封

古殿の扉は朽し紫苔は封ず

楹榎椽撓似癡宅

楹は榎み椽は撓り癡宅に似たり

茅屋年古上生松

茅屋は年 古りて上に松 生る

可憐南朝天子詔

憐む可し南朝 天子の詔

拝覽漏屋敗檐中

拝覽す漏屋の敗檐の中

語釈

古詔書引觀 古い天子の詔の書を正し見る。 閼宮 御霊や、奥深く閉ざされた廟。 寥落 寂しく静か、奥深く広い。 阿蘇の宮 阿蘇神社。

雄鷄 雄鳥 午風 正午の風 神拝し畢訪る 神に詣でそして、終わりに訪ねる。 宮司宅 神主の家。 古殿 古い神殿 御殿 名刺 名札の意、我が

国では初対面の時に渡す。 慇懃 懇ろに、丁寧に、よしみ。 請い 要請、頼み。 秘蔵物 秘密にしまつてある大切なもの。 少間 少しの間、ちょっと

一老翁 一人の老人。 屬 付く。 纒辨ず 僅かに判る、少し弁える。 正平 平和、太平後村上帝の正平十九年五月堺裏の道祐居士が刊行した経典。

國事 國の政務。 軍兵 軍隊、兵。 徴収 徴發、徵募。 功をす 論功行賞。 中就く 沢山ある物事の中でとりわけて。 文亦工 文章がとて

も上手 奇者れ 夫れはとても奇妙、珍しい。 假名字 仮名文字。 綸言 天子のお言葉。 後奈良院 後奈良上皇。 宸筆 天子の直筆。 椒房 皇后の

御殿、転じて皇后。 山椒は暖気と良い匂いを与え、又実を多く結ぶので、子孫が多くなるという意味で、御殿の壁に塗り込んだと言つ。 擬し なぞえる。

似せる、諮る、疑う、紛い。 婉容 淑やかな姿、素直な顔立ち。 桐函 桐の函、箱。 教令 教化、命令、父母の教えや言いつけ、時節に応じて為すべ

きことの規定、礼記の月令など。 筆筆 筆の跡。 渾 盛んに帯る、全て。 蹤 蹤跡。 尊氏 足利尊氏。 文辭 文章や言葉、筆跡。 簡古 古くて簡。 素書

手紙、昔に白絹に書いたことから言つ。 正鋒 筆鋒、さきて、鋭い筆先、筆知。 古書 古い、昔の書物や書。 紛れ 紛失、無くなる。 數無し 少ない、

数多く無い。日を繼看るついでに見る＝次の日もその次も。全盛ぜんせい＝一番威勢の、又栄えてゐる時。王室おうしつに戮力りくりき＝王室に力を合わせ、協力、戮力。精忠せいしゅう嶋じま＝忠義に
 精出し鳴らす。爾時じつじ＝この時。官司くわんじ貴く且かつつ富む＝官司は身分が高くその上金持ちであつた。大廈たいか＝大きな屋根、大きな家。大廈たいか＝大きな家が倒れよ
 うとしてゐる時一本の柱で支えられるものではない、國家が亡びる時一人の力では支えきれないと言つとき、文中子より。高殿こうてん＝高殿、高くて立派な家。
 蒼宮そうくう＝青空、天、蒼天。摩ま＝迫る、磨る、かすめる、匹敵する。物換り星移るものかへりほしうつ＝風物が変わり月日も経る。古殿こてん＝古い御殿、宮殿。紫苔むらさきこけ＝紫の苔。封
 す＝封じる、塞く。楹えい＝柱、垂木。函はつ＝二つの箱、函。捧たかげ＝。両手で支え額の辺まで持ち上げる。案上あんじやう＝供物を乗せる台。黒漆くろしつ＝漆を塗り黒み
 がかった赤い漆塗り。素桐すどう＝白桐、素地のままの桐。髹しゅう函はつ＝漆塗りの函、箱。詔宣しよくせん＝詔、天子の命令。一半いちはん＝半分の意、漢語的表現。蠹蟲くわんちゆう＝木喰
 い虫、衣類や書物に付く虫。くて太い柱ちゆう＝頎けい＝長い、丈が高い、懇ろ。椽えん＝垂木、丸い柱。年古ねんこ＝年代が徑ち古い。憐れんむ可かし＝可哀想に。南朝なんてう＝南北
 朝時代の南の朝廷。天子てんし＝天皇。詔しよく＝詔。拝覽はいらん＝拝見。漏屋ろうおく＝あばら屋、雨の漏る家。敗檐はいえん＝破れた庇、破れた屋根葺き下ろしの軒端。たるき。搗とう
 搗たわみ、こごく、反る、歪む。癡宅はいたく＝廢屋。似じ＝似る、真似る。茅屋ぼうおく＝茅葺きの家。

通釈

奥深く閉ざされた廟寂しく静かな安蘇神社、ただ雄鳥が午の風に合わせて鳴くのが聞こえる神社に、参詣
 の後官司の宅を訪ねる、古い御殿の扉ノックして名刺を通じる、丁寧に観るを請う秘密に 収蔵さ漆の箱いま一れ
 た大切な物を、少しして私を迎える一人の老人、二つの箱を捧げ出て台上に置く、そのつ素桐の箱、先に漆の箱を
 開く悉くである、詔宣の半分には木喰い虫が蝕んでいる、僅かに平和を弁えて國の政務を興す、或いは軍隊や兵を
 徵発し或いは論功行賞を行う、とりわけ珍しいのは仮名文字である、写し出すお言葉の文また巧み、後奈良院の直
 筆と伝えられる、皇后の筆に似せて淑やかで美しい極みである、次に素桐の箱を開いたが教化命令が多い、筆の跡

全て戦争の跡を残している、足利尊氏の文章や言葉筆跡は最も古くて簡素である、二寸の絹に鋭い筆先で書いた手紙、この他古い書類無数に紛れる、更に従って日を継いで看るもまだまだ終わらない、想う昔阿蘇氏全盛の日、皇室に力を合わせ忠義に精をだし鳴らした、この時安蘇の宮司は身分が高くその上金持ちで地方の豪族であった、大きな家の高殿が青空に迫る、風物も変わり年月も経て今は古いにしえと異なり、古い御殿の扉は朽ちて紫の苔が塞がっている、柱は傷み梁は撓み廢屋のようである、憐れと云つか南朝の天子の詔、拝み観る雨の漏るあばら屋の破れた庇の中で。